

令和元年 6 月 28 日(金)18:30 から平鹿総合病院 2F 会議室に於いて、「医療被ばく 管理・相談」をテーマに今年度の県南支部第 1 回学術研修会が開催されました。2 施設から過去の経験を基にした発表がありました。そして、後半は事前に各施設に配布したアンケート結果に対する意見交換が行われました。平日開催にもかかわらず 17 名の参加をいただきました。

初めは平鹿総合病院の佐藤会員から、「乳がんを発症した妊婦の一例」と題して出産に至る経緯と放射線検査の進め方に対してのお話がありました。

患者さんは 16 週目ぐらいに胸にしこりを感じてはいたが、妊娠による体の変化と思いそのまま放置していたそうです。しかし、左右差があることに気付きかかりつけの先生に相談後に紹介されてきたそうです。

エコー検査により乳がんと診断されましたが、出産を第一に考え放射線による検査は帝王切開が可能な 34 週目まで待つことにしたそうです。そして無事出産後、乳がんの病期診断のため CT・RI 検査が集中して行われ、幸い他に転移なども認められず、無事治療を終え退院されたとのことのお話でした。

このような経験を基に、ICRP の基本的な考え方と胎児線量に対する説明がありました。中でも、適切に行われた X 線検査で流産、奇形、神経発達遅延が自然発生を上回ることはない。そしてまた、核医学検査は高い胎児線量をもたらすことはないとのことのお話もあり、胎児線量に対して改めて再認識させられました。

次に横手市立病院の細谷会員からは、「中絶をすすめられた妊婦さんからの被ばく相談」と題して詳細な経緯のお話がありました。

内容は、妊娠している可能性があるとは思っていたが、腹痛で CT 検査を受けた後に妊娠が判明し、かかりつけ医からは中絶をすすめられるも、どうしても生みたいということで相談に見えたそうです。

対応として、ICRP の資料などを使い胎児に対するしきい線量は 100mGy であり、今回受けた CT 検査による線量は 50mGy にも達していないことを数値で説明されたそうです。また、その資料を持ってかかりつけ医の所へ行くようにも助言したそうです。資料を見た先生は自分の考えが古かったと話していたらしく、その後無事元気な赤ちゃんを産むことができたとの報告でした。

この時の対応への反省点として、胎児の被ばく線量のデータが揃っていなかったこと、胎児への奇形は自然にも発生することなどの説明をしなかったことなどを挙げていました。さらに相談を受けた時の記録を残し、情報を共有することも大事であると話されました。これを伺い相談を受ける側の傾聴の大切さを強く感じました。

アンケート結果を基にした意見交換では、ポータブル撮影等で同室者・介助者への配慮はされていますか？(一般病棟に小児科もしくは産科患者が同室している場合など) の問いに対しては、ほとんどの施設が 2mルールに基づいて行動しているようでしたが、場合によっては心情に配慮して退出していただく場合もあるとの意見が多か

ったように思います。

次に、妊娠している・妊娠の可能性のある方の検査時に配慮されていることはありますか？の問いに対しては、胸部撮影を例に挙げて、撮影範囲を絞り画像上でも絞りが確認できるようにしている施設がほとんどでした。また、不要であると分かっている患者さんの気持ちをくんで下腹部にプロテクターを付けている施設も見受けられました。その他には、撮影前に光照射野を実際見ていただき、撮影後にはプレビュー画面で腹部にX線が当たっていないことを確認してもらうなどの取り組みをしている所もありました。

限られた時間ではありましたが被ばく管理・相談に対する詳細な取り組みを伺うことができ、今後の業務に活かすことのできる研修内容でした。

(記 加羽

馨)



